

【銅賞】

『米に感謝して』

宮崎市立清武中学校 1年 井久保 陽菜

さわやかな青空と風にゆれ黄金色に輝く稲穂。今日八月一日はわが家の一大イベント稲かりの日である。私の住んでいる地区には農家の方がたくさんいて多くの農家の人は、この時期、稲かりで忙しくしている。私の家は祖父母が農業を営んでいて日頃は仕事に行っている私の父も稲かりを手伝い、私と母と妹は飲み物を買に行ったりお弁当を運んだりとサポートにまわる。家をでて少し行くと見渡すかぎり美しい田んぼが広がり、私はこの風景を見るたび夏が来たことを感じる。

私は五年生の時、米づくり体験を学校の行事としてやらせてもらった。田植えは機械を使わず全て手で植えていく。ひもを田に張りひもについている印のところになえを植えていくのだ。地味な作業だがこれが意外と楽しかった。しかし、足ははだしで田んぼに入るため泥に足を取られて何度も転びそうになった。そして、一つ一つ手作業で植えていくため、やはり時間がかかり大変だ。稲かりも田植えと同じく手作業で行うため機械で作業するよりも何十倍も時間と労働が必要となる。また、かまを使ってかるため危険度も増し、より大変な作業となる。このほかにもかった稲を束ねて干し、脱穀する作業も全て手作業で天候にも左右されやすい。さらに昔は、私達がやったように百人以上の人では行わないので少人数でこの大変な作業をこなしていたことになる。本当に、機械を使わずに米づくりをやっていた人には頭が下がる思いだった。私はこの体験を通して、私達の主食である米の大切さを学ぶと同時に祖父と祖母はこんなに大変なことをしていたんだと実感し、見ているだけでは分からないと驚いた。

五年生の時、米づくり体験をしてから私は父もこの農業を継ぐのだろうかと何度も考えた。父に聞くと「継ぐかどうかは分からない。」という返事しか返ってこない。私的には継いでほしいと思っている。もし、父が祖父母の農家を継ぐとしたら私も継ぐことになるかもしれない。自分が継いでいくのは、幼い頃から見て来た祖父母の仕事を継いでいくことになり、それはわくわくするしうれしい。しかし、幼い頃から見て来たからこそ、そして学校行事で体験したからこそ大変さが分かり不安もある。でも、農家という職業は、この世の中でなくてはならない職業で、農家の方々が頑張ってくれているからこそ、みんなこうして何不自由なく暮らせるのだ。だから、農家の人達は縁の下の力持ちだと私は思う。私が農業を継いで一生懸命がんばることで喜んでくれる人がいるはずだ。稲かりがやっと終わった八月三日に食べた新米は一粒一粒が真珠のように白く輝いていて、かむと甘くてとてもおいしかった。私も農業を継いでも継がなくても、この米のように人が感動するような何かをつくり上げたい。そして、こうやって人を喜ばせるような仕事がしたい。と強く思った。米づくりは機械で行うようになっても、やはり米一粒一粒をつくるためには、大変な作業をしなければならぬ。そんな米づくりを毎年やっている祖父母を私はとても誇りに思っている。みんなにも、毎日食べているお米をつくった人達が、どんなに大変な思いをして、「おいしい」と言ってくれる人達の事を思い浮かべながら日々頑張っていることを考え、知ってほしい。私は、そんな人達のために頑張る祖父母を支えつつ、米だけでなく毎日の食事に感謝して日々を過ごしていきたい。